

# 2022年度夏季大学講座 創立者の特別文化講座：『人間ゲートを語る』に学ぶ<sup>1</sup>

田 中 亮 平

夏季大学講座にご参加いただきまして大変にありがとうございます。

今日は、創価大学の創立者池田大作先生が、2003年に開催した特別文化講座『人間ゲートを語る』についてお話しさせていただきます。流れとしては、はじめに創価大学の歴史においてこの特別文化講座が開催されたことの意義を考えてみます。次に講座に即してその内容のあらましを振り返り、後半では創立者の青春時代からこの講座に至るまでの時期を俯瞰しつつ、ゲートと創立者の関わりを跡付けてみたいと思います。

## はじめに 特別文化講座開催の意義について

最初に、創価大学にとっての特別文化講座開催の意義という点を少々考えてみたいと思います。開催されたのは、2003年3月10日のことでありました。落成後四年ほどたった本部棟四階のM401教室というところが会場になりまして、創立者はおよそ一時間半ほど講義をしました。その内容は、同じ階のすぐ隣のM402教室にも同時配信されており、学生はこの二つの教室に集まって創立者の講義を聞いたわけです。この時教室に集まったのは、多くがまさにこの三月に卒業していく学生たちでした。その意味で、彼らにとっては学生生活の終わりを控えて、思い出となるような講義であり、同時にこれから社会に巣立とうとする彼らの今後の生活に役立つ指針を聞くことができた、そういう機会でもあったと言えます。

さらにこれとは別に、創価大学の歴史という観点からみますと、この2003年という年は1971年の創価大学開学以来、三十二年が経った頃になります。このことを念頭に置いて、ここで四つの点からこの講座の意義を考えてみます。すなわち、ひとつには創立者が教室の教壇の上で講義をしたという点、さらに聴衆はこの時まさに在学している学生たちであったという点、三つにはそれが講義という形でなされたという点、四つ目はそのテーマが文学であったという点です。

創価大学開学の二年前、1969年5月3日、創価学会の本部総会で創立者は創価大学の開学について言及し、「人間教育の最高学府たれ」に始まる建学の三指針を発表しています。

---

Ryohei Tanaka (創価大学文学部教授、副学長)

<sup>1</sup> 本稿は創価大学で2022年8月27日に行われた夏季大学講座で筆者が行った講義内容をもとに、加筆修正を施したものである。

そして、この講演の中で創立者は次のように話しています。

広く内外の一流の学者、創価大学設立の精神に賛同する人々にも、希望に応じてどしどし教壇に立っていただくことも考えております。わたくしも勉強させていただきたいと思っておりますし、もし大学当局よりお許しをいただければ、文学論の講義をさせていただきたいと思っております。

創立者がこの時述べた文学論の講義をしたという点について、その後開学以降の経緯の中では実際どうなったかを見てみたいと思います。ひとつには1973年の三期生の入学式で、「創造的人間たれ」と題した講演がなされています。これはのちに草創三部作と呼ばれることになる講演のひとつです。その後、入学式や卒業式、また創大祭の記念行事など、様々な機会に創立者から多くのスピーチや講演がありました。それらを聞いた学生たちのなかには、そこから自分の人生にとっての有益な方向付けを見出し、卒業後もそれを励みにしてそれぞれの人生を歩んでいった人たちも多かったわけです。

しかしながらこうした講演と開学前のスピーチにあった「文学論の講義」とは、やはり同じではない。講演の形式の場合は、例えば中央体育館や池田記念講堂のように、大きな会場で数千人の学生に対して行われており、教室での講義とは趣を異にするものであったと言えます。つまり「文学論の講義」の場合は、通常教室の教壇の上で、通常の在學生に向かって、講義や授業のような形式で、文学をテーマにして行われることが想像されるわけです。

その意味で、より近い形式で行われたのが、他でもないこの夏季大学講座でした。先ほどの第三回入学式が行われたのと同じ1973年に、第一回夏季大学講座が開催されました。そこで創立者も、午後の全体会で講義をしています。その論題がまさに「文学と仏教」ということでした。翌1974年、第二回目の夏季大学講座があり、その時も創立者は初日の午後の全体会で、「人生と学問」と題して講義をしました。

先ほどの開学二年前の講演の時に述べられている「文学論の講義」という発言から想像される四つの項目のうちの一つ、つまり通常教室の教壇、講義の形式、文学がテーマ、これらが実現されたのが、この夏季大学講座であったと言えます。残る一つが、通常の在學生という点ですが、2003年の特別文化講座はまさに創大に在籍している学生のために通常教室の教壇での講義形式で、文学をテーマに開催された初めてのケースでした。

入学式や卒業式などでの講演形式の場合は、通常話し手は学生に向かって語ります。その際に学長をはじめとする教職員は話し手の両脇または後方に位置しています。それに反して、この特別文化講座の場合、壇上は創立者のみで、その背後や脇に教職員が位置することはありませんでした。その結果、教員職員学生という大学を構成する共同体の全員が教室の座席に位置を占め、教壇の創立者の方を向いてその話を聞くという形になったわけです。創価大学の歴史の中でも特別な光景だったと言えます。

## I. 特別文化講座のあらまし

### 導入

それでは、講座の内容に入っていきたいと思います。

講座のあらましですけれども、創立者はゲーテの生涯を順を追って紹介しながら、その折々のゲーテの言葉や振る舞いを通して、今まさに社会に巣立ち行こうとしている卒業生たちの将来に役立つような指針や指導を語る、こうした流れで進められました。

おおまかにこれを六つのパートに分けてみました。最初に導入部分がありまして、誕生と父母、特にゲーテの両親について。続いて学生時代。ゲーテは二つの大学に行っていますが、創立者は特に詩人としての自覚に注目して語っています。三番目はゲーテの名を一躍ドイツ中、またヨーロッパ中に響き渡らせた「疾風怒濤」時代で、その導火線となった一つの出会いが語られます。四番目は政治家としての活躍、五番目はゲーテの結婚、最後に彼の死が語られ、むずびの言葉が添えられて終わります。

導入の部分でさっそくゲーテからの引用がこのように紹介されます<sup>2</sup>。

まず私が青春時代から好きだったゲーテの言葉を贈りたい。

「誠実に君の時間を利用せよ！

何かを理解しようと思ったら、遠くを探すな」<sup>3</sup>

これは、私の座右の言葉でした。

さらにゲーテは言います。

「まことに、青春というものは、ありあまるほど多くの力を内蔵している」<sup>4</sup>

(語らい 12 : 69)

一つ目はゲーテの詩集の中の「格言風に」と題された章に含まれる詩で、日々の努力の着実な積み重ねの中に、大きな成長の原因が作られることを、またもう一つは、青年の内面的成長をテーマとした長編小説『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』のはじめの方で、絶望に陥った主人公が再び蘇生していく姿を描く部分に見られる言葉です。学生時代を終えて巣立ちゆく青年たちへのはなむけとして、創立者はまずこの二つの言葉を贈りました。

### ① 誕生と父母

ゲーテの父と母について、創立者はそれぞれの人となりを表す興味深いエピソードを紹介しつつ、まじめで一徹な父親と、明るく聡明で物語好きな母親像を伝えていきます。その中で母親がモットーとしていた言葉も紹介されます。それは「生きるために学べ、学ぶために生きよ」<sup>5</sup>とい

<sup>2</sup> 以下特別文化講座からの引用は次の書籍に拠っている。創価大学学生自治会編『創立者の語らい12』。創価大学学生自治会、2004年。同書からの引用は本文中に（語らい12：ページ）と記す。

<sup>3</sup> 高橋健二編訳『ゲーテ格言集』。新潮社、1991年、88。なお編訳者による「あとがき」によればこの新潮文庫の一卷は戦時中に出版され、1952年に一回目の改版、1991年に二回目の改版が施された。

<sup>4</sup> 前田敬作・今村孝訳『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』。潮出版社、1982年、68。

<sup>5</sup> ゲオルク・ブランデス著、栗原佑訳『ゲエテ研究』。改造社、1937年、27。

うものでした。

前半は誰にも分かりやすいものです。生活するには収入を得るために知識や技術を身に付け、それを使って仕事をすることで生きることができる。学ぶのはそのためにあるということです。しかし後半はちょっと謎めいています。「学ぶために生きよ」、つまり学ぶことが目的であって、生きることがその手段であると言っているわけです。

創立者はここでは特にこの言葉には立ち入らず、他のエピソードに移りますので、必然的にこの言葉の真意は聴衆の考察にゆだねられることになります。この点については、あとでまた考えてみることにしたいと思います。

## ② 大学時代 詩人とは

ゲーテは十六歳でライプツィヒ大学に入学し、父の希望で法学を学ぶことになりますが、すでに家庭での徹底した英才教育を受けていたこともあって、法学にはあまり興味を抱くことはありませんでした。彼の関心は別の学問、特に文学にありました。創立者はそうした学生ゲーテの姿をこのように語ります。

学生時代の主体的な学びの努力が、目覚ましいほど豊かな人間形成の糧となったことは当然です。

書かなくてはいけない。読まなくてはいけない。それが、青春時代の特権です。

(語らい 12 : 85)

学生ゲーテについて語っているので、当然のことながら創立者は「学び」の重要性に言及しています。しかしその学びは学生時代に限るものではないと続けます。

大人になってからも、同じです。勉強しない人間、読まない人間、学ばない人間は、どうしても頭が硬直化してしまう。

(語らい 12 : 86)

たとえ学生時代が終わったとしても、「学ぶこと」自体が終わるわけではないことが述べられます。

## ③ 国民詩人誕生とヘルダー

創立者は次にヘルダーによる薫陶に話を進めます。ヨハン・ゴットフリート・ヘルダーはゲーテよりも五歳年上で、二人が出会ったのは今はフランス領のストラスプールという町でした。当時ゲーテはこの町の大学で法学の勉強を仕上げて学位を取るために学んでいました。たまたまヘルダーがこの町の眼科医に目の治療をしてもらうために来訪してきたのです。

ゲーテはすでに新進の哲学者・評論家として知られていたヘルダーに、進んで会いに行きます。ヘルダーはそんなゲーテに対して歯に衣着せぬ辛辣さで厳しく接します。創立者はこのように語ります。

ヘルダーの厳しさは並大抵ではなかった。ゲーテに対しても、それはそれは厳しくあたりました。叱責や非難、罵倒、嘲笑。そういうふうにして試練を与えた。

また、ゲーテの学問に見栄や虚飾などを感じると、ヘルダーは、辛辣な言葉を投げつけました。(語らい 12: 91)

さらに創立者は、この時期の鍛錬の日々を晩年になって振り返ったゲーテの言葉も紹介します。ゲーテ自身こう語っています。

「自己満足、うぬぼれ、虚栄、自負、高慢といったような、私の心中に巢食い、あるいは働いていたいっさいのものが、きわめて厳しい訓練にさらされることになったのは、なんとしても幸福といわざるをえなかった」<sup>6</sup> (語らい 12: 94)

この当時ゲーテは二十一歳、特別文化講座の聴衆の学生たちとほぼ同年代でした。青年ゲーテの姿を聴衆の学生たちに重ねながら、創立者は呼びかけます。

ゲーテは二十歳前後の学生時代に、詩人、作家としての骨格を築いていった。

二十歳前後は一番大事です。多くのことが、ここで決まる。私の体験からも、そう言えます。

「自分自身の骨格を築く」ことが、学生時代、青春時代の一つの目的であることを忘れてはなりません。(語らい 12: 95)

#### ④ ヴァイマルの政治

この後ゲーテは戯曲『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』や小説『若きウェルテルの悩み』でドイツの国民文学創出の旗手として華々しくデビューします。彼は「シュトルム・ウント・ドラング」と呼ばれる青年世代の文学革新運動の中心でした。彼の作品に魅了された小国ヴァイマルの青年公爵カール・アウグストから客人として招かれて赴いた地は、結局ゲーテがその生涯を過ごす地になりました。

ゲーテに接して、今度はその人柄に魅了された公爵はゲーテを様々な官職に付けていき、最終的には自身に次ぐ公国第二の地位である財務長官に就かせます。その期待に応えて、ゲーテも政務に奮闘します。その様子を創立者はこのように語ります。

彼、ゲーテは、この厳しき現実のなかにあって、大臣として責任を一身に担いました。財政の立て直し。また農業、林業、鉱業などの産業の促進。道路建設や治水。さらに教育・学術の振興。そして進歩的な福祉の導入——これらをつつひとつ、確実に実現していきました。(語らい 12: 100)

不羈奔放な青年詩人であったゲーテは、一方では非常に社交的な人でもありました。これはと思った人物には自ら面会を求めに行ったり、手紙を書いたりしました。また快活で才気あふれるゲーテは多くの人を魅了しました。その反面、ヘルダーの厳しい薫陶を進んで自分の糧としていく一面も持っていました。そのゲーテが政治の世界に入って、人々のために貢献することを選んだのには、ゲーテなりの信念がありました。創立者はおよそ二十年後に書かれた『ヴィルヘルム・

<sup>6</sup> 河原忠彦訳『詩と真実—わが生涯より—』第二部。潮出版社、1979年、356。

マイスターの修業時代』にある、次のような一節を紹介します。

人間形成がある段階に達したら、より大きな集団に身を投じることをおぼえ、自分以外の人々のために生き、義務にかなった活動に没頭することを習うのが、身のためになります。そうやって初めて、自分自身を知ることができるのです<sup>7</sup>。（語らい 12：100）

ここには、人々と共に働き、人々のために生きることは、自分自身の何たるかを知る事にも益し、ひいては自分を作る事にもつながるといふ考えが示されています。ここでもまた創立者は社会に巣立ちゆく学生たちにゲーテの事例を通して励ましを送っているのです。

## ⑤ 結婚

ヴァイマル公国での政治にたずさわっていたゲーテですが、最初の十年ほどは公国の中枢で精力的に働きました。その間に貴族にも列せられています。その後 1786 年秋から 88 年の夏にかけて二年足らずの間イタリア旅行の期間がありまして、帰国後しばらくしてゲーテはクリスティアーネ・ヴルピウスという普通の庶民の娘と知り合い、その後二十年近く事実婚の形で共に暮らすこととなります。

いわば身分違いの間柄だったのですが、二人の間にはすぐに子供も生まれますので実質的には夫婦だったわけで、正式な結婚の時代も含めますとおよそ三十年にわたって仲睦まじく暮らしました。しかしながら貴族社会を中心に世間的な無理解は強く、クリスティアーネは、肩身の狭い思いをしなくてはなりません。ゲーテは彼女を常に気にかけて大切にしました。小規模な公爵国の宮廷社会にあって、市民階級出身でありながら最高位の地位にのぼったゲーテのことで、その妻の出身や現状の立場などについて芳しからぬ評価が繰り返されたことは容易に想像できます。にもかかわらずゲーテは、そうした風評から彼女を守り通し、クリスティアーネもゲーテを支え続けました。

その二人を、私的な生活の上でも筆舌に尽くせぬ悲しみが襲います。二人の間には子供が全部で五人できます。しかし、成人するまで育ったのは最初の子供のアウグストだけでした。次に生まれてきた子供たちは、死産だったり生後わずかですぐ亡くなったりしています。

社会との関係性においても、家族の運命においても、苦しみや悲しみが襲ってきた結婚生活でした。創立者はこの二人の姿勢を通して参加者に語りかけます。

苦勞が多いから不幸なのか。

そうではない。

人生は戦いです。戦って、戦い抜いて、どんな不幸も乗り越えていていただきたい。苦勞があってもなくても、何ものにも左右されない絶対の「幸福」をつかむのです。私はそれを訴えたいのです。（語らい 12：107）

---

<sup>7</sup> 『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』。前掲書、440。

## ⑥ 死

特別文化講座も最後に近づき、いよいよゲーテの死の部分に移ります。

創立者は初めによく知られている言葉である「もっと光を」に言及しています。ゲーテの親しい側近の一人、クードレーという人が書き残した言葉ですが、創立者も述べているように、その人の記録では「部屋のよろい戸を開けて、もっと光が入るように」という言葉でした。しかし、人間と世界の真実を探求し続けたゲーテの一生を象徴的に表現する言葉として、広く伝えられることになったわけです。創立者はこの言葉について、師と仰ぐ戸田城聖と語り合った内容を回想しています。

『「もっと光を」という一言からは、『もっと世界を見つめたい』『もっと世界から学びたい』『もっと世界と対話したい』、さらに『もっと世界のために生きて、そして、もっと世界のために行動したい』とのゲーテの生命の奥底からの叫びが、聞こえてくるようではないか』  
(語らい 12 : 113)

この戸田の言葉に含まれる世界との四つのかかわり方、つまり「世界を見つめる」「世界から学ぶ」「世界と対話する」、そして「世界のために生き、行動する」は『ファウスト』を想起させます。つまり、その第一部でファウストが新約聖書のヨハネによる福音書の冒頭部分にある「初めにロゴスありき」という言葉を、ギリシャ語からドイツ語に翻訳し直す場面があります。「はじめに言葉ありき」という訳を出発として、ロゴスを「思い」「力」と訳し変え、最後に「行為」で満足します。はじめの二つは精神的な活動に属し、あとの二つは実践的な経験に属すると分けてもいいでしょう。

これと比較してゲーテ自身の生涯最後の言葉、そこに現れた願望を語る戸田城聖の言葉も「見つめる」「学ぶ」は精神的な活動に、「対話する」「生き、行動する」は実践的な活動に属するという順序になっており、その点では「認識から行為へ」という『ファウスト』の主要モチーフと合致していると言えます。ただし、違いもあります。劇中人物のファウストは学問の世界、精神的認識の世界を捨てて行為の世界に向かいますが、ゲーテ本人の方は政治をはじめとする行為の世界はもちろん、旺盛な意欲をもって諸科学の研究にいそしみ、生涯にわたって精神的な活動も続けます。戸田の言葉が世界との四つの対峙の仕方を並列的に述べているのにはその反映が見て取れると言えましょう。

続けて創立者はゲーテの死生観に言及します。はじめに助手のエッカーマンが伝える言葉が紹介されます。

死を考えても私は泰然自若としてられる、なぜなら我々の精神は絶対に減びることのない存在であり、永遠から永遠に向かって絶えず活動していくものだと思確信しているからだ<sup>8</sup>。  
(語らい 12 : 115)

エッカーマンという人はゲーテの晩年の十年間助手の役割を勤め、作品集の出版を助けた人

<sup>8</sup> エッカーマン著、山下肇訳『ゲーテとの対話』。岩波書店、1969年、145。

ですが、同時にゲーテの言行録を丹念に残した人です。それらはゲーテの死後にまとめられて全三巻の『ゲーテとの対話』として出版されます。このゲーテの発言は二人が出会った翌年、1824年の5月2日のものとして記録されています。沈みゆく太陽を眺めながらしばし物思いに沈んだ様子のゲーテが、五世紀のギリシャの詩人ノンノスの詩の一説「沈みゆけど、日輪はつねにかわらじ」を口にした後に語った言葉です。永遠の生命についてのゲーテの確信を述べた言葉で、その保証は絶えざる活動にあるとしています。

さらに創立者はゲーテが長年の友人の音楽家、ツェルターという人にあてた書簡の一節を引用します。

宇宙に帰りゆく迄、たゆまず活動を続けよう<sup>9</sup>。 (語らい 12：同)

この手紙は1827年3月、ツェルターの最後の息子が死んだという知らせに対して書かれました。長命を恵まれたものの定めとして、身近なものの死という苦悩を耐え忍ばねばならないという慰めの言葉に続いて記された励ましの一文です。ここでもたゆまぬ活動こそ生と死を超越する方途であるとの確信が述べられています。

またゲーテ自身の死の五日前に書かれた最後の手紙も紹介されます。

私にそなわっているもの、残っているものを、できるだけ向上させ、私の特性を浄化させることより、私にとって緊要なことはありません<sup>10</sup>。 (語らい 12：116)

これも生涯の友人の一人、ヴィルヘルム・フォン・フンボルトにあてた手紙です。この人はドイツのベルリンにあるフンボルト大学の創立者として有名です。この人に宛ててゲーテが書き残したのは、自分がやりたいと思っていることは、自身をさらに向上させることだということです。また私の持っている特性に磨きをかけ、より純粋なものにしていくことだと言います。

創立者はゲーテのこうした姿勢を総括して語ります。

ともあれ、最後の最後まで戦い抜き、太陽のごとく赤々と輝き続けた崇高な人生であった。それがゲーテであった。皆さんも、そうあっていただきたい。 (語らい 12：同)

## 結び

結びに創立者は二つのゲーテの言葉を引用します。一つは

私は人間だったのだ。そしてそれは戦う人だということを意味している<sup>11</sup>。

もう一つは

有能な人は、常に学ぶ人である<sup>12</sup>。 (どちらも語らい 12：117)

はじめの方は『西東詩集』という詩集にある「入口」という詩の一節で、天国の入口に來た詩人が、あなたには天国に入る資格となるような、どんな英雄の証があるのかと問われ、人として

<sup>9</sup> 中村恒雄著『ゲーテに於ける生と死と不死性の関係』。河出書房、1967年、25。ただしこの箇所は木村謹二訳の引用である、木村謹二訳『ゲーテ全集』第三十二巻。改造社、399。

<sup>10</sup> 高橋健二著『ヴァイマルのゲーテ』。河出書房新社、1975年、494。

<sup>11</sup> 『ゲーテ格言集』。前掲書、162。

<sup>12</sup> 同、141。



詩人として戦いの一生を送ってきたのだと答える部分です。ゲーテの戦いとは人として詩人として向上のための活動を貫くということであったのは先に見た通りです。

もう一つはローマの警句詩人マルティアリスの詩ですが、ゲーテの『箴言と省察』という格言集に取り入れられたものです。創立者はこの詩を通して「本当の人間とは学ぶ人である」（語らい12：同）として、学び続けることの重要性を訴えて講座をしめくります。

## Ⅱ．創立者とゲーテ

### ①若き日の創立者と「読書ノート」

以上が特別文化講座『人間ゲーテを語る』のあらましとなります。ところで、このタイトルに関して、二つの点で疑問が湧いてきます。ひとつは、この第一回の特別文化講座の題材にほかならぬゲーテが選ばれたのはなぜだったのかという点です。というのも、ユゴーや魯迅、またトルストイをはじめとして、創立者は多くの講演であまたの文学者を取り上げているからです。

それからもう一つは「人間」ゲーテを語るとなっていて、詩人としてのゲーテでもなく、またゲーテの作品を論じたものでもない。少なくともそれが主眼ではないことです。

はじめになぜゲーテであったかということですが、それを考えるヒントになるのが創立者の著作『若き日の読書』です。正統二編がありますが、初めの巻のほうにこういう一節があります。

一書の人を恐れよ。

書を読め、書に読まれるな。

自己を作る事だ。それには、熱烈たる、勇気が必要だ。

\*

冒頭の自戒の言葉は、私が昭和二十一年（一九四六）から翌二十二年ごろにかけて、せつせと書きしるしていた「読書ノート」に見られる一節だ<sup>13</sup>。

この書は全二十編からなっていますが、その一つ目に「少壮時代の生き方」と題して国木田独歩の『欺かざるの記』が取り上げられています。いま紹介した箇所はその冒頭部分です。

「一書の人を恐れよ。書を読め、書に読まれるな」という言葉は耳にしたことがある方もおられると思いますが、ここで注目したいのが、「自己を作る事だ」という部分です。書物を読むことは大事だけれども、それが自分の人間形成、人格形成にしっかりとつながっていくような読み方をしなくてはならないという意味だと思われます。こういう決意で創立者は十七歳から十八歳のころに読書をしていたということです。

引用の中にある「読書ノート」については、「はしがき」のところにも触れられています。

また私は、かつて信仰の道に入る以前に読んだ本の抜き書きを「読書ノート」として、十四年まえの『第三文明』誌に半年ほど掲載したことがある<sup>14</sup>。

そこで私も図書館で十四年前、つまり一九六四年の『第三文明』を探して、連載されていた「読

<sup>13</sup> 池田大作著『若き日の読書』。第三文明社、1978年、1993年新装版、10。

<sup>14</sup> 同書、1。

書ノート」を読んでみました。3月号から8月号まで全六回に分けて四ページずつ連載されています。もちろん発表されたのは全体の一部分だと思いますが、私はそこにゲーテを含むドイツ文学からの抜き書きを探してみました。するとヘルダーリンから二つ、シラーから一つ、そしてゲーテから五つの抜き書きが見つかりました。ゲーテ以外の二人も彼と同時代の人たちです。

そこで注目すべきことは、ゲーテからの抜き書きは『若きウェルテルの悩み』でもなければ『ファウスト』でもなく、ゲーテの晩年の詩の数節であったということです。そのうち三つほどご紹介します。

みずから勇敢に戦った者にして初めて、  
英雄をほめたたえるだろう、  
暑さ寒さに苦しんだ者でなければ、  
人間の値打ちなんかわかりようがない<sup>15</sup>。

これはゲーテが七十歳の時に出版した詩集『西東詩集』に出てくる一編です。「みずから勇敢に戦った者」、これはもちろん戦争などで戦うという意味だけではなくて、様々な人生の事業をいろいろな苦難に直面しながら成し遂げる場合も含まれます。創立者が特別文化講座の最後で紹介した「戦う人」と同様の意味だと考えていいでしょう。そして、その際に最後までともに戦った同志にしてはじめて、立派な仕事を成し遂げた人の偉大さが本当にわかるんだという意味の言葉です。

次に「最もよいこと」というタイトルがついた詩の抜き書きもあります。

頭と胸の中が激しく動いていることより  
結構なことがあろうか！  
もはや愛しもせねば、迷いもせぬ者は、  
埋葬してもらうがいい<sup>16</sup>。

ちょっと辛辣なおわりかたをしています。頭と胸の中というのは考えをめぐらせて悩んだり、胸の中、つまり感情が千々に乱れたりときめいたりして激しく動いている、それが生きているということだから、それ以上に結構なことはないだろうと訴えている詩であります。

三つ目の詩はふたたび『西東詩集』からで、「ズライカ」というタイトルがついています。この詩集は中世のペルシャに舞台を設定して、詩人のハーテムという人を主人公にしています。その恋人の名前がズライカで、彼女が作った詩という意味です。

民もしもべも征服者も  
みな常に告白する  
地上の子の最高の幸福は

---

<sup>15</sup> 高橋健二訳『ゲーテ詩集』。新潮社、1951年、1967年改版、212。巻末の注にはこのようにある。「なお、この訳詩集は昭和十三年来「新訳ゲーテ詩集」として版を重ねてきたものであるが、新潮文庫に入れるにあたって、文句を平易にし、多少の改訂を加えた」。

<sup>16</sup> 同書、217。

ただ人格だけであると<sup>17</sup>。

民とは普通の民衆で、しもべというのは奴隷のことです。征服者は支配者あるいは王を意味します。つまり身分が中間でも下でも上でもということで、彼らの真情の告白は一致している。すなわち、この世に生まれた人間にとって何が最高の幸福であるか、それはただ人格であると。

ここで想起されるのが、「読書ノート」にあった若き創立者の自戒の言葉です。そこには「自己を作る事だ」と書かれていました。ただいまのゲーテの詩にある「最高の幸福は人格である」という一節に一致していると考えられます。創立者の読書の目標は「人格」を磨き上げることにあったわけです。それが人間として生まれた最高の幸福であるとのゲーテの言葉によって裏付けられたと言えます。

人生の師匠と仰ぐことになる戸田城聖との出会いの直前の創立者の心境であったことがこの読書ノートから読み取れます。聖教新聞紙上にシリーズで掲載された「山本伸一」名の創立者の随筆がありますが、2010年8月21日掲載分に、当時の心情が回想されています。

昭和二十二年の夏八月、わが人生の師・戸田城聖先生と初めてお会いする前夜、十九歳の私が読んでいたのは、ゲーテであった。

終戦後の混沌の只中であって、ゲーテとの心の対話が、平和の師子王たる戸田先生への求道の序奏となったことは確かである。

ここに「ゲーテとの心の対話」という表現がありますが、太平洋戦争に敢然と異議を唱えて獄につながれた「平和の師子王たる戸田先生」は、池田青年にとってゲーテの言う「戦う人」としての真の「人間」であったと言えます。まさにゲーテが戸田城聖との出会いの序奏となっていたのです。

『若き日の読書』には創立者がこの頃を述懐した次のような文章があります。

あの敗戦の年——私は十七歳である。四人の兄を戦争にとられ、残された家族の生計は、五男である私の肩に、ずしりと重くのしかかっていた。四月と五月の空襲で家を二度も焼かれ、父も病気がちであり、結核を病んでいた私は血痰を吐きながら働いた。思えば、苦しい青春の日々であった。

そのような創立者のみならず、多くの人々にとって活字は希望の光であったと綴られます。創立者は印刷会社に勤めながら夜学に通います。

その帰りに神田へ寄っては、蓄えた小遣いで古本を探し、手に入れるのが、私の唯一の喜びとなった。

私は主に文学書や哲学書を、夢中になって読んだ。感銘した文章に接すると、すぐさまザラ紙のノートに書き写した。

書を読み、書に読まれるな！自己を作る事だ——そう自分に言いかけせながら、つぎつぎと読破していったのは、青春時代の懐かしい思い出である<sup>18</sup>。

<sup>17</sup> 同書、219。

<sup>18</sup> 『若き日の読書』、10。

生涯の師匠との出会いの前夜、創立者は結核のため命の保証さえない状況のなか、ゆるぎない自己の確立を求めて懸命に学んでいた。軍国主義から民主主義へと一八〇度価値観が転倒し、何を信じればよいのか分からない時代の中であって、すでに創立者にとってはゲーテが非常に親しい存在であったわけです。ただ親しいだけではなく「自己を作る事」あるいは「最高の幸福は人格である」、こういう「自己」「人格」の完成へ向けての方向性が、池田青年の中に確固としてあり、そうした確固たる信念の部分でゲーテを我が物にしていたということが分かります。

特別文化講座の論題になぜゲーテが選ばれたのか、その理由はこれで明らかになったと思います。聴衆は二十二歳ごろの学生で、当時の池田青年とほぼ同年齢であることも理由となったかもしれません。

## ②「人間ゲーテを語る」との演題

さて、もう一つの問いは「人間ゲーテを語る」の「人間」についての疑問でした。ゲーテの作品を語るのではなくゲーテという人物、またその生涯を論じるということです。創立者は『若きウェルテルの悩み』や『ファウスト』も繰り返し縦横に論じていますが、この時には「人間ゲーテ」という題でした。

ヒントとなるのは『私の人物観』という創立者の別の著作です。先ほどの『若き日の読書』と同時期に出版されていますが、そこにはゲーテも含めて、トルストイ、ノーベル、ダンテなど、古今東西のさまざまな偉人の生き方が論じられます。

その前書きに次のようにあります。

私の意図は、それらの人々の専門分野での業績をうんぬんすることにあるのではない。  
(中略)

ともかく彼らは一心不乱に生きた。誤り多く、怠惰に棹さしがちな人間の可能性の埒塙のなかで、“何か”を志して、生涯戦いつづけた。そこに温かい目を向ける時、彼らの足跡は、失敗や錯誤を含めて、人間としての紋章のように思えてならないのである。(中略)

つまり私は、それら著名人の生き方を通して、有名無名を問わず流れ通っている、人間性の“根”の部分に触れたかった。志したところは、「偉人論」というより「人間論」にあったのである<sup>19</sup>。

ここにも「何か」を志して、生涯戦い続けた」と書かれています。創立者にとってゲーテもそうした人物の一人であったことはこれまで見てきたとおりです。さらに「人間性の“根”」とあります、それは偉人と言われる人たちが作り上げた「自己」であり「人格」にはほかなりません。偉人たちの人生の様々な場面で、それがどんな風に発揮されたのかを論じる、そういう意味での「人間論」であったことが分かります。

---

<sup>19</sup> 池田大作著『私の人物観』。潮出版社、1978年、1。

さらに「有名無名を問わず」という言葉は、偉人たちだけではなく、たとえ無名の庶民であっても、創立者が最大の関心を寄せるのは「人間性の根」であり「自己」であり「人格」だったと言えます。読書ノートに抜き書きされたゲーテの詩「民もしもべも征服者も」の一節が想起されるところです。

戦後間もないころの池田青年、およそ三十年後のこの書物を出版した頃の創立者、そしてさらに二十五年後の特別文化講座を語る創立者、いずれの時期にあってもその最大の関心事は、偉人の業績を語るのではなく、苦闘の末に作り上げられた彼らの「自己」であり「人格」であり「人間性の根」にあったのです。「人間ゲーテ」という論題もまた、この首尾一貫した関心のもとに選ばれたと考えることができるのです。

### ③学術講演の時代—自律と共生のテーマ

創立者は創価大学創立から三年後の1974年、アメリカのカリフォルニア大学ロサンゼルス校で行った講演を皮切りに、90年代後半あたりまで海外諸大学・学術機関での講演を展開していきます。75年のモスクワ大学での講演、91年と93年に行われたハーバード大学での講演をはじめ、欧米に限らずアジアや中南米まで、まさに世界を股にかけて行われました。

多様なテーマがその中で展開されていきますが、特に繰り返し強調されている点として、「自律」と「共生」に焦点を当ててみます。

最初に74年のカリフォルニア大学での講演を見てみます。タイトルは「21世紀への提言—ヒューマニティーの世紀に」となっています。結びの方に次のような一節があります。

人間は知性的に人間であるだけではなく、精神的、更に生命的にも、人間として跳躍を遂げなければならないと信ずるものであります。

と述べたあと

その課題は、今日の誰人にも課せられております。まず、自ら人間としての自立の道を模索すべきだと思います<sup>20</sup>。

と呼びかけています。知識は非常に進み科学技術もずいぶん発達したが、二十世紀も残り四半世紀という段階で、知識だけでは解決できない問題が次々と出てきている。こうした問題意識から出発し、欲望や無常の現象に紛動される「小我」を乗り越えて、内なる生命の實在、すなわち「大我」に依拠して欲望を制御しつつ、自立した自己を円満に発達させていくことができる。つまり「人間の自立」が問題解決の方途であるとしたのが、この講演の結論でした。

この講演を皮切りに、「欲望の支配」と「自立した自己」は繰り返し講演のテーマとして取り上げられます。一口に欲望と言っても経済的な欲望もあれば権力欲や征服欲もある。それらに囚われてしまえば、根源的な人間の悪を生む原因になりかねない。そういう根源的な欲望の支配を脱するためには、それらに紛動されないゆるぎない人格をつくるしかない。すなわち「自立した

<sup>20</sup> 池田大作著『「人間主義」の限りなき地平 海外諸大学での講演選集Ⅱ』。第三文明社、2008年、231。なおこの講演では「自律」ではなく「自立」と表記されている。

自己」を目指さなければならない。この点をさまざまな国の学術機関で、創立者はそれらの国々の歴史や文化を踏まえながら論じ続けています。

その代表的な例として、スペインのアテネオ文化・学術協会で1995年6月に行われた講演、「21世紀文明の夜明けを」<sup>21</sup>を見てみましょう。これには副題がついていて「ファウストの苦悩を超えて」となっています。いうまでもなくファウストはゲーテの戯曲の主人公です。21世紀に向けて人類が超克していかなくてはならない問題こそ、ファウストが煩悶した苦悩に他ならないとして論が進められます。

ではこのファウストの苦悩、行き過ぎた現代の欲望をどうやって超えればいいのかという問題に対して、それを乗り越えるには上の「自律」に加え、さらに「共生」と「陶冶」が必要であると論じていきます。アテネオ文化・学術協会の講演では、この三つがテーマになっていくわけです。

ほかにも、1991年9月のハーバード大学での「ソフト・パワー」と「ハード・パワー」をめぐる講演<sup>22</sup>では、「ソフト・パワー」、すなわち内発的なもの、人格的なものの重要性を論じています。これは自律に通じるものですが、創立者はそれに「縁起観」を加えます。これは仏教でいう関係性の考え方です。人間と人間の関係性でもあるし、また人間と自然との関係性でもある、すなわち共生です。

さらに東洋での講演の例として1994年1月に深圳大学での講演<sup>23</sup>の中でも「自律」と「縁起」の人間主義を論じています。これが東洋や中国にある等身大の人間主義であると。

このように、創立者は特に1980年代から90年代にかけて国際社会での活動を縦横に展開していきませんが、その中心に大学をはじめとする学術機関での講演がありました。その骨子となっていたのが、危機に瀕する二十世紀文明、あるいは西洋・近代文明の行き詰まりを打開するにはどうしたらいいのかという問いでした。

創立者の答えは人間に光を当てることでした。一つには個人のレベルで、他方では社会のレベルで人間の変化を考えていくことです。個人のレベルは、いかにして欲望に左右されないゆるぎない人格を作るか、そのための方途です。もう一つは身近な人からはじまって世界に至るまで他者と協同して生きる、社会・世界との共生という関係性です。この自律と共生の二つが相まって新たな人間主義の時代を作っていかなければならない、こう繰り返し訴え続けることが、この学術講演の時代の大きなテーマであったと言えます。

そしてこのことを踏まえて、改めて若き日の創立者が目指したものを振り返ってみますと、そこに長い年月を超えて一貫しているところざしが浮かび上がってきます。それはあの「自己を作る事だ」という若き日の自戒の言葉に始まるところざしです。自己を作る事、それはゆるぎない人格をつくることであり、創立者は「最高の幸福は人格である」という晩年のゲーテの言葉を、十代のおわり頃に一つの理想、目的としてところざしたことが分かります。さらにこのところざ

<sup>21</sup> 同書、51以下。

<sup>22</sup> 池田大著作『21世紀文明と大乘仏教 海外諸大学での講演選集』。第三文明社、2000年、177以下。

<sup>23</sup> 『講演選集II』、139以下。

しはその後数十年の時を経ても変わらず、世界的な広がりを見せつつ、多様な文化を背景とする人々の共感を呼びながら、同時に語る場所の独自性を十分に踏まえる中で語られた幾多の講演のメインテーマの一つとなっていたのです。

#### ④ 結びの言葉：「学び続けること」

創立者が講演の最後に結びの言葉として、「有能な人は常に学ぶ人である」という格言を紹介しています。また講演自体の最大のテーマの一つ、これも「学び続けること」でした。最後にこの点を考えて終わりたいと思います。

講演で創立者が引用したものではありませんが、このようなゲーテの詩があります。

遠い世界と幅広い生  
長い年月の誠実な努力  
探求を怠らず 常につくりだし  
決して終局はないが 時には仕事を仕上げ  
昔のものを大切に守り 新しいものも喜んで取り入れ  
意識は澄み渡り 目的もけがれなし  
さあこれでひとつの道のりがこなせよう (筆者訳)

「神と世界」と題された一群の詩があって、その冒頭に掲げられた六十八歳の頃の詩です。詩人としての自身の来し方を振り返った詩とも読めますが、人間が学ぶということに即して読んでみると、また別の読み方が味わえる詩です。

まず私たちが生きている世界、それは遠い世界もあるし、身近な世界もある。ゲーテはその生涯を通して、ドイツ文学はもちろんのこと、隣国の文学、はては遠い異国の文学にも思いをはせ、そこから学ぶことも多くありました。次に幅広い生です。自分の関心ごとをずっと突き詰めるのもいいけれども、一方では知識は広く世界に求めよと、いうことですね。旅に出て様々な生活の体験から学ぶことも多いでしょう。

次は時間軸です。「長い年月の誠実な努力」、これは創立者が特別文化講座の冒頭に引用した「誠実に君の時間を利用せよ」の詩と重なります。「探求を怠らず常につくりだし 決して終局はないが 時には仕事を仕上げ」。何か新しいものを常につくっている。それを繰り返していくと、探求には決して終わりはない、どこまでも続きがある。しかし時にはまとまった仕事を仕上げることもある。

過去と現在の対比もなされますが、ゲーテの答えはその両方です。昔のものを大切に守る一方で、新しいものに対しても、目を閉ざさず喜んで取り入れていく。

こうして、意識を澄み渡らせ、正しい目的を設定すればもう間違いなく仕事ははかどる、ちゃんと進んでいける。自戒の言葉とも読めますし、読者を励ます言葉とも読めます。創り続け、学び続けるひとの心組みを披瀝したものとも言えます。

創立者はこの特別文化講座で、学生に対して繰り返し、学ぶこと、生涯学び続けることの大切

さを訴えます。何のために学ぶのか、それは単に知識を得るためではなく、人格をつくるためだと。創立者自身の青年時代からの目標がこれであった。そうした青春時代、また生涯の先々までそういう人生を歩んでもらいたい、その願いを巢立ちゆく卒業生に伝えたのだと言えます。

ゲーテの母の箇所が出てきた「生きるために学べ、学ぶために生きよ」という言葉の謎も、これで明らかになりました。生きること、つまり人生の目的というのは、人格という最高の幸せを作ることにある。したがって、生きている限り人格の完成を目指して学び続ける、そこに幸福がある、それが「学ぶために生きよ」の意味するところであったと言えるでしょう。

以上で終わります、ご清聴ありがとうございました。